

「産学連携に携わって6年目のツブヤキ」

島根大学 共同研究センター 北村 寿宏

1. はじめに

島根大学地域共同研究センター（現：共同研究センター）の専任教官（教員）として、産学連携の仕事に携わって6年目に突入した。丸5年が過ぎて一区切りと言うところである。この間、ずいぶんといろいろなことがあり、取り巻く状況も大きく変わってきている。この夏、オリンピックを見ながら、いろいろなことに思いを巡らした。

この仕事に就いた最初のころは、産学連携、あるいは、産学官連携という言葉すらなじみが無く、何のことだか分からないまま、メーリングリストの情報や専任教官会議などの会議に参加し、諸先輩方の活動を参考に見様見真似でこなしてきたような気がする。6年目ともなるとそれなりに見えてくるものがあり、最近の活動や学外とのやりとりを行っていて、時々「アレッ」と違和感を覚えることがある。

2. 産学連携とは何だろうか？

違和感を覚えながら活動するのは性に合わず、立ち止まって考えてしまった。人間、暇だとよけいなことを考えるようにできているらしい。

大学はこれまで社会に直接的な貢献をしてきていないように見られており、経済の行き詰まりから、何かを生み出す資源の一つとして注目されているようである。また、社会、特に行政や産業界から、これまでの分を取り返すがごとく様々な要求を突きつけられているように感じている。特に、産業活性化など経済活動に直接的な貢献を求められているようで、研究費、管理費、知的財産、技術移転によるリターン、報奨金・・・とお金にまつわる言葉を耳にしない日はない。また、産学連携の大学側の窓口として活動を行っている、地方自治体や経済産業省など地域経済の活性化への寄与など官の圧力も強く感じるこのごろである。

このような日々が続くと、時々、「大学に何を期待しているんだ！！ 他人に期待しても無駄だよ。世の中、自分の期待通りに相手が動いてくれるはずがない。」と叫びたくもなる。きっと、自分たちの社会での役割認識を十分できず、もしかしたら、そんなことも考えたこともなく、時代の閉塞感の出口を自分と異なる他の社会（セクター）に求めているのかもしれない。それは、大学自体にも当てはまりそうだ。

では、大学自体の社会での役割は何であろうか？ なんとと言っても教育機関としての役割が第一であろう。確かに研究と言われる事もあるかもしれないが、地方大学で過ごした限り、地域社会に必要な人材を送り出すことが大学の社会的な役割と強く感じられる。そうであれば、産学連携も最終的には教育、特に、学生教育に寄与するものではないといけないのではないだろうか。

これを前提に日々の活動を見直してみると、必ずしもそうならない部分が見受けられる。これはほんの一例だが、共同研究に学生を参加させる場合はどうするのか？、卒業研究などで生み出された発明の取り扱いはどうするのか？、先ず議論しなければならないはずなのに後回しにされている。

本当にこれで良いのだろうか？ 疑問がふくらんでしまった。

3. 産学連携のオルターナティブ

現在、知的財産立国を旗印に研究機関としての大学の役割がこれまで以上に強く求められている。社会のニーズを認識しつつ、研究活動を行い、大学での研究成果を世の中で活用し、次の研究活動に結びつけていく、このサイクルに研究資金と特許などの知的財産をセットして、知的創造サイクルを回し、知的財産立国を築くということだろう。世界の中の日本と考えた時、確かに必要なことだと思う。しかし、本当に片田舎の地方都市でもこんな事を目指さないといけないのだろうか？ 見方を変えると、この活動って、20世紀型の高度成長を

もう一度と言っているようにも思えてくる。21世紀、パラダイムが大きく変化していることに気づいていないのだろうか？

最近考えていることは、産学連携にもいろいろなタイプがあって良いのだ、ということである。

今もてはやされている、あるいは、官主導で引っ張っているのは、成長・拡大を目指した20世紀型のパラダイムを基にした産学連携のように感じられる。新しいパラダイムでの産学連携があっても良いのではないだろうか。あるいは、「阿吽の呼吸」の産学連携も悪いことばかりではないようにも思える。地方にいと、ふと、そんな考えにさせられる。こんな天の邪鬼的な考えをしているとやる気がないのかと言われそうだ。

では、新しいパラダイムとそれに基づく産学連携とは何だろうか？

新しいパラダイムでは、人口減少と縮小のもと、個人の幸福度、充実度、自己実現といった指標で計り、それらの増大を目指す社会となるとも言われている。この社会では、個別実現、ソフト、ミクロ、過程（実現するプロセス）、ネットワーク、水平、連携、横断的……と言ったキーワードが重要になる。

こんな社会がどこにあるのと思ってしまうが、そう思って、身の回りを見てみると、今回のオリンピックを見ていてここにあるではないか。また、専任教官（教員）のネットワークをみるとここにもある、さらに、起業家スクールなどを行っている、起業家の社会もまさにこのパラダイムで成り立っているように見える。新しいパラダイムは、確実に社会に浸透して行っているように感じられる。

このパラダイムでの産学連携とはどんなものだろう。

例えば、地域社会と大学とが共同で、地域社会や大学の活性化を行うこと、すなわち、そこに関与する人がお互いに刺激し合い支援しあうことで生き生きとすること、と思えてくる。大学側に限って言うと、産学連携を大学と社会という現場を繋ぐものと位置づけ、産学連携を通して大学の教職員が実社会という現場を知り、ここで経験した事を学生教育に生かす、また、新たに生み出した価値を社会に活用し広げていく、そのような産学連携があっても良いと思えてきた。

地域全体がよりよい社会の実現という一つの目標に向かって動き出し、その中で大学自身（それぞれの教職員）が役割を認識し、様々なセクターと連携していく。遠い将来であってもそんな姿を見たいものだ。そんな姿を実現するためには、信頼、役割認識、相手を支援すること……が重要な鍵となりそうだ。

4. 夢の実現に向けて

どうしたらそのような産学連携が実現できるのだろうか？

3年前からベンチャービジネス論や起業家スクールなど、起業と言う観点から、講習会や講義を島根県と一緒に進めてきた。講師の先生方や実際に起業された方々の話を聞き、様々なおつきあいしていく内に、みなさんに共通点があることに気づいた。この共通点とは、「自分で夢を見つけ、夢に向かって絶対にあきらめずに努力すること」、そして、「夢を実現するプロセスで自分を表現し周りの人々に感動を与えること」である。オリンピック選手と起業家とを見比べてこんな事を考えていた。これが、産学連携のオルターナティブのヒントになるような気がする。

では、夢とはどこから生まれてくるのだろうか？ 夢とは、与えられるものではなく、自らの頭で考えて作り上げていくものだろう。ある日パッとある思いがひらめき、そしてその思いを巡らし、どうしたら実現できるのかを考え始めた時、単なる思いから夢に変わって行くのではないだろうか？ その夢を実現するためには、**Policy, Vision, Passion, Action** の4つの要素が不可欠であると思われる。様々な判断基準となる **Policy**、社会に新しい価値を提供する **Vision**、それを実現すると言う **Passion**、そして実現するための **Action**、これらが揃って初めて夢の実現に向けて進んでいける。

さて、我が身に振り返って、夢って何だろうか？ 仕事の上では、産学連携を通して地域社

会から必要とされる大学に変えていくことだろう。街にある宝を掘り起こし、繋ぎ合わせ、その地域を元気にし、住民を幸せにする。産学連携を進めて、そんなことができればすばらしいと思う。だが、まだまだ思いは醸成していない。夢になるまでには、もう少し時間がかかりそうだ。

Policy, Vision, Passion, Action は、まだ十分ではないようだ。暇に任せて考え、膨らませることにしよう。おっと、考えるだけでなく Action がなければ、考えにふけていると、つい忘れてしまいそうだ。毎日机に向かっていないで、行動してみよう！

▼おまけ = メンター修行中

メンターという言葉をご存じだろうか？

メンター (Mentor) の語源は、古代ギリシャ時代の有名な叙述誌「オデュッセイア (The Odeyssey)」の登場人物である「メントール (Mentor)」という男性の名前にある。メントールと言う男性はオデュッセウス王のかつての親友であり、王の息子テレマコスの教育を任せられ、王が遠征している間息子の良き支援者、指導者、理解者となり見事にテレマコスに帝王学を身につけさせた。

この由来に基づき、今日では、メンターという言葉は人生経験の豊富な人、支援者、指導者、後見人、助言者、教育者の役割を全て果たす人を包括的に意味する言葉として用いられる。特に、起業家を支援する人と言う意味で使われることが多いようだ。

産学連携の仕事をしていて、時々、メンターのような役割ではとってしまう。私自身、今のままではメンターと呼ばれるにはほど遠いが、夢を実現したいという様々な人を応援・支援するメンターになる努力を続けることはできそうだ。様々な人々から信頼されるメンターを目指して日々修行を続けて行きたい。決してあきらめずに！！それがもう一つの夢になるかも知れない。

(平成16年8月)

参考文献 例えば

- 1) 福島正伸：「相互支援型組織」 <http://www.entre.co.jp/index.html>
- 2) 片岡 勝：「人生のルールを乗り換えてみる」 青春出版社
- 3) 友成真一：「現場でつながる地域と大学」 東洋経済新報社